

『平家物語』における漢籍の受容

謡 口 明

The Reception of Classical Chinese Works in the “Heike Monogatari”

Hajime Utaguti

It is thought that those who created and transmitted the “Heike Monogatari” had a profound knowledge of works in Classical Chinese. However, when they inserted a character from the Chinese classics into the “Heike Monogatari” they judged that character from a uniquely Japanese perspective and value system. From the standpoint of comparative literature, research must center on the differences in the portrayal of each character in the original Chinese and as received in this Japanese classic.

「平家」の原話を生成・流伝した人々は、漢籍に造詣の深い人々であったと思われる。しかし、漢籍に掲載される人物を「平家」に取り入れる際には、わが国の特有な人物評価や価値観をもって取り入れている。比較文学の観点に立って考えると、漢籍における人物の実像とわが国の独特な受容のあり方の比較検討が研究の中心に据えられるべきである。

はじめに

『平家物語』の研究は、精密な研究がなされ専門外の立場から研究動向を概観すると、考究、考察の余地のないほどに研究成果が蓄積されている。ところで、『平家物語』には漢籍の影響が大きいと言われ出典・引用等の調査は厳密になされているにもかかわらず『平家物語』における人物造型と漢籍における人間実像との比較、及び中国の時代背景等について言及する論文は少ない。更に『平家』の研究には読み本系・語り本系と諸本間の校勘・比較研究に重点がおかれ、漢籍における人物像の評価が等閑に付されている傾向があるように見受けられる。そこで、『平家物語』に登場する、中国の歴史上の人物について、漢籍の立場から、歴史的な評価、人物評価について考察し、『平家物語』の人物造型の一端を究明してみることにする。そこには日・中における文学観・価値観の相違も見い出せるであろうと考えられるからである。

第一章『平家物語』における歴史解釈

『平家物語』巻頭の「祇園精舎」では、「遠く異朝をとぶらへば」と名指しされ、非難される人物が四人登場する。その中で、秦の趙高・漢の王莽・唐の禄山については、仕えた王朝に対する忠誠の点から考えれば、反逆・悪人のレッテルを貼られたとしても当然である。ところが、梁の朱异に関しては、主君として仕えた梁の武帝の意を汲み、武帝のために力を尽くしたことが、梁の崩壊につながったと非難されるのである。つまり、歴史事実としての不忠者であると糾弾される人物像と、『平家』における「皆舊主先皇の政にもしたがはず……」という意識のくい違いが明瞭に表れるのは、梁の朱异に顕著な特徴を見い出すことができるのである。秦の趙高は、始皇帝の遺書を改竄して長子扶蘇が二世皇帝となるべきであることを、暗愚な胡亥を二世皇帝としたために、秦帝国は崩壊の道をたどることとなった

のである。漢の王莽は、伯父王鳳の力で列侯の爵を与えられて昇進し、元帝の王皇后が、太皇太后として摂政したのを助け、平帝を即位させ国政を総括した。その平帝を毒殺して漢王朝を滅ぼし新王朝を創設した。唐の安祿山は詳述するまでもなく、玄宗皇帝・楊貴妃にとり入り范陽で反乱の火の手をあげ、玄宗皇帝を退位に追いやり、楊貴妃を死に追いやっているのである。彼らの所業は王朝に対する反逆・反旗を翻すという具体的な行動で知られている。ところが、朱异は梁の武帝が中原を平定した夢を見、その折偶然なことに東魏の侯景が武帝に帰順を申し入れてきた。梁朝では侯景の帰順に対する意見が賛否両論に分れた。武帝の心の中の思い（中原の地を統一する野望）を察し、武帝の意向にそう発言をした。武帝も夢にこだわり、侯景の帰順を受け入れた。しかし侯景は東魏の討伐軍に破られ、寿春に退却。翌年東魏と梁が友好関係を結びかけたので、梁に背き、都の建康を陥落させ武帝を殺して自ら帝位についたのである。异に対して梁書では、「善く人主の意を窺いおもねり曲り、阿諛を能くして以て上旨を承り、故に特に寵任せらる」と述べて、朱异の臣下としての不忠を述べている。が、侯景を受け入れたのは武帝が夢を見、中原統一の野望をもち、決断したからで結局梁王朝の興亡に対する責任は武帝にあるはずである。とりわけ「平家」で極悪非道な人間の四人に挙げられるのは、武帝の長子、昭明太子は『文選』の撰録に深く関わり、わが国の平安宮廷では『白氏文集』『文選』は貴族の必読書と言われるほど愛好され親しまれてきた書物である。その『文選』の編者である昭明太子の属した梁王朝が侯景によって滅亡させられた。その侯景を梁王朝に引き入れる要因を作ったのが朱异であり、この上ない大悪人であるとしているのである。歴史事実に照らして考えれば、侯景を窮鼠の立場に追いやったのは、他ならない武帝であり、梁の外交政策に一貫性がなかったことが滅亡の最大の理由である。侯景は東魏の高観の部将で、高観の死後、その子高澄に服せず、西魏にくだったが、

西魏が受け入れなかったので、梁に降り、梁は河間王に封じた。ところが、東魏は西魏と争っていたので、梁に講和を求め、梁がこれを認めたため、侯景は立場がなく、梁から東魏につき出されないとも限らないという不安感に迫りやられ、その不安から転じて兵をあげ、南下して建康を包囲し、梁軍は包囲されること五ヶ月にして開城し、八十六歳の武帝は監禁されて餓死同然で死んだのである。

つまり「平家」を生成・流伝するにあたってわが国で愛好されている『文選』に対する特別な思いがあり、その思いとは梁王朝に対する判官びいきに近い感情がこめられている。それを滅亡に迫りやった元凶として朱异を大悪人の中に列挙するのである。このような、わが国のみにおける特別な思いが含まれていると考えられる叙述は次の『平家物語』巻二の蘇武に見られる。中国の歴史事実とは大きく異なる表現が随所にある。「平家」では、「はじめは李少卿を大將軍にて三十万騎むけられたりけるが、」と述べているが、天漢二年の遠征軍は貳師將軍が三万騎に将として酒泉を出ることになっていた。この時、李少卿、つまり李陵は、漢の武帝より軍旅の輜重のことを命ぜられた。李陵に割くべき騎馬の余力がないので、李陵は歩兵五千人で、この遠征軍に参加したのである。漢文は誇張表現があると言われるが、「平家」のこの箇所は途方もない誇張である。更に「次に蘇武を大將軍にて、五十万騎をむけらる。」とあるが蘇武は捕虜交換のための平和使節として派遣されていたが、平和使節団の副使が匈奴の内紛に関係したため、使節団全員が囚われてしまったのであり、蘇武は大將軍でもなく、まして五十万騎を率いた事実はないのである。最後に李陵の祖父李広が百万騎を率いて胡国を破り、蘇武を救出して、漢につれもどすと「平家」では叙述する。この蘇武の記述を考察してみると、飛將軍として辺境の地で部下の責任を一身に受けて自刎した名将李広に対する判官びいきに類する特別な思い入れがあり、李広とその孫、李陵を用いることによって

蘇武の「漢節十九年」の人間ドラマを盛りあげようとしたと思われる。この蘇武は、鬼界が島へ流罪となった平康頼が二首の歌を書きつけた卒塔婆千本流したものの一本が漂着して都の噂となったという「薩摩潟よりはるばると都までつたはりけるこそふしぎなれ。あまりにおもふ事はかくしあるにや。」と述べた例証として用いられているため、歴史的事実よりも劇的な展開を考慮に入れている傾向があり、誇張や事実に反する表現を用いて展開しているようにも考えられる。

これに対して、巻五、咸陽宮は、「史記」荆軻列伝の記述に、かなり忠実で、しかも燕の太子丹の記述は、「史記」正義注に基づき記述しているのである。「平家」を生成した人々が、『史記』を丹念に読み、内容を把握した上で、「平家」の原話として作成しているように考えられる。

なお比較研究にあたっては、岩波古典文学大系の「平家」を中心に考慮することとする。

第二章 咸陽宮（平家卷之五）と『史記』荆軻列伝の比較

第一節 類似する内容の資料

1. 燕の太子丹といふもの、秦始皇にとらはれて、いましめをかうぶる事十二年、太子丹涙をながひて申けるは、「われ本国に老母あり、いとまを給はってかれをみん」と申せば、始皇帝あざわらって「なんぢにいとまをたばん事は、馬に角おひ、烏の頭の白くならん時を待つべし。」

（正義注）燕丹子云、太子丹質於秦、秦王遇之無礼。不得意、欲帰。秦王不聴、謬言曰、令烏頭白、馬生角、乃可。丹仰天歎焉。即為之烏頭白、馬生角。

（燕丹子に云ふ。太子丹秦に質たり。秦王之を遇するに礼無し。意を得ず、帰らんと欲すれども、秦王聴かず。謬言して曰はく、烏をして頭白く、馬をして角を生ぜしめば、乃ち可なり。丹天を仰ぎ歎ず。即ち之が

ために烏の頭白く、馬の角生じたり。)

2. 始皇帝、烏頭馬角の変におどろき、綸言かへらざる事を信じて、太子丹をなだめつつ、本国へこそかへされけれ。始皇なをくやしみて、秦の国と燕の国のさか井に楚国といふ国あり。大なる河ながれたり。かの河にわたせる橋をば楚国の橋といへり。始皇官軍をつかはして、燕丹がわたる時、河なかの橋をふまばおつる様にしたためて、燕丹をわたらせけるに、なじかはおちいらざるべき。

(正義注) 燕太子云……王不得已、遣之。爲機発橋、欲陷。

丹過之、爲不発。

(王已むを得ずして之を遣る。機発の橋を為り、陥いらしめんと欲す。丹之を過ぐるも、為に発せず)

3. 又范於期といふ兵あり。これは秦の国のものなり。始皇のためにおや・おち・兄弟をほろぼされて、燕の国ににげこもれり。秦皇四海に宣旨をくだいて、「樊於期がかうべはねてまいらせたらん物には、五百斤の金をあたへん」とひろふせらる。荆軻これをきき、樊於期がもとにゆひて、「われきく。なんぢがかうべ五百斤の金にほうぜらる。なんぢが首われにかせ。取て始皇帝にたてまつらん。よろこんで観覧へられん時、つるぎをぬき、胸をささんにやすかりなん」といひければ、樊於期おどりがり、大いきついで申けるは、「われおや・おち・兄弟を始皇のためにほろぼされて、よるひる是をおもふに、骨髓にとをって忍がたし。げにも始皇帝をほろぼすべくは、首をあたへんこと、塵あくたよりもなをやすし」とて、手づから首を切てぞ死にける。

(史記、本文) 私見樊於期曰、秦之遇將軍、可謂深矣。父母宗族、皆爲戮没。今聞購將軍首金千斤、邑万家。將奈何。於期仰天太息流涕曰、於

期毎念之、常痛於骨髓。顧計不知所出耳。荊軻曰、今有一言可以解燕国之患、報將軍之仇者、何如。於期乃前曰、為之奈何。荊軻曰、願得將軍之首以獻秦王。秦王必喜而見臣。臣左手把其袖、右手搥其胸。然則將軍之仇報、而燕見陵之愧除矣。將軍豈有意乎。樊於期偏袒揜腕而進曰、此臣之日夜切齒腐心也。乃今得聞教。遂自勁。

(私かに樊於期に見えて曰はく、秦の將軍を遇すること、深しと謂ふべし。父母宗族、皆為に戮没せらる。今、聞く將軍の首に金千斤、邑万家に購ふ、と。將奈何せん。と。於期、天を仰ぎて太息し、流涕して曰はく、於期、之を念ふ毎に、常に骨髓に痛む。顧だ計、出づる所を知らざるのみ、と。荊軻曰はく、今、一言にして以て燕国の患ひを解き、將軍の仇に報ゆべき者有らば、何如、と。於期、乃ち前みて曰はく、之を為すこと奈何せん、と。荊軻曰はく、願はくは將軍の首を得て、以て秦王に獻ぜん。秦王、必ず喜びて臣を見ん。臣、左手に其の袖を把り、右手に其の胸を搥さん。然らば則ち將軍の仇は報いられ、而うして燕の陵がるるの愧は除かれん。將軍豈意有らんや、と。樊於期、偏袒揜腕して進みて曰はく、此れ臣の、日夜切齒腐心するところなり。乃ち今教へを聞くを得たり、と。遂に自勁す。)

4. 又秦舞陽といふ兵あり。これも秦の国の物なり。十三の歳かたきをうって、燕の国ににげこもれり。ならびなき兵なり。かれが嘔てむかふ時は、大の男も絶入す。又笑てむかふ時は、みどり子もいだかりけり。これを秦の都の案内者にかたらうて、ぐしてゆく。

(史記本文) 燕国有勇士秦舞陽。年十三殺人。人不敢忤視。乃令秦舞陽為副。

(燕国に勇士秦舞陽有り。年十三にして人を殺す。人、敢て忤視せず。乃ち秦舞陽をして副為らしむ。)

5. 荆軻は燕の指図をもち、秦舞陽は樊於期が首をもつて、珠のきざ橋をのほりあがる。あまりに内裏のおびたたしきを見て、秦舞陽わなわなとふるひければ、臣下あやしみて………荆軻たち帰って、「舞陽まったく謀反の心なし。ただ田舎のいやしきにのみならつて、皇居になれざるが故に心迷惑す」と申ければ、臣下みなしづまりぬ。

(史記本文) 荆軻奉樊於期頭函、而秦舞陽奉地圖匣。以次進、至陞。秦舞陽色変振恐。群臣怪之。荆軻顧笑舞陽、前謝曰、北蕃蛮夷之鄙人、未嘗見天子。故振懼。願大王少假借之、使得畢使於前。

(荆軻、樊於期の頭の函を奉げ、而うして秦舞陽は地図の匣はこを奉ぐ。次を以て進み、陞に至る。秦舞陽、色変じて振恐す。群臣、之を怪しむ。荆軻、顧みて舞陽を笑ひ、前みて謝して曰はく、北蕃蛮夷の鄙人、未だ嘗て天子に見えず。故に振懼す。願はくは大王、少しく之を假借し、使ひを前に畢ふるを得しめよ、と。

6. 指図の入つたる櫃のそこに、氷の様なるつるぎ見えければ、始皇帝これを見て、やがてにげんとし給ふ。荆軻王の御袖をむずとひかへて、つるぎをむねにさしあてたり。

(史記本文) 秦王発図。図窮而匕首見。因左手把秦王之袖、而右手持匕首搥之。

(秦王図を發く。図窮まりて匕首あらは見る。因りて左手もて秦王の袖を把り、而うして右手に匕首を持ちて之を搥す。)

7. 始皇の給く「われに暫時のいとまをえさせよ。わが最愛の後の琴の音を今一度きかん」との給へば、荆軻しばしをかしたてまつらず。始皇は三千人のきさきをもち給へり。其なかに花陽夫人とて、すぐれたる琴の上

手おはしけり。^{をよそ}凡この後の琴のねをきいては、武きもののふのいかれるもやはらぎ、飛鳥もおち、草木もゆるぐ程なり。況哉いまをかぎりの観聞にそなへんと、なくなひき給ひけん、さこそはおもしろかりけぬ。荆軻も頭をうなだれ、耳をそばだて、^{ほとんと}殆謀臣のおもひもたゆみにけり。后はじめてさらに一曲を奏す。「七尺の屏風はたかくとも、おどらばなどかこへざらん。一條の羅縠はつよくとも、ひかばなどかはたえざらん」とぞひき給ふ。荆軻はこれをききしらず、始皇はきき知て、御袖をひつきり、七尺の屏風を飛こえて、あかがねの柱のかげににげかくれさせ給ひぬ。

(正義注) 燕丹子云、左手搥其胸。秦王曰、今日之事、從子計耳。乞聽瑟而死。召姬人鼓琴。琴声曰、羅縠単衣、可裂而絶。八尺屏風、可超而越。鹿盧之劍、可負而拔。王於是奮袖、超屏風走之。

(燕丹子に云ふ、左手に其の胸を搥す。秦王曰はく、今日の事、子の計に従ふのみ。乞ふ瑟を聴きて死せん。姬人を召して琴を鼓せしむ。琴声に曰はく、羅縠単衣、裂きて絶つべし。八尺の屏風は超へて越ゆべし。鹿盧の劍は負ひて抜くべし。王是に於て袖を奮ひ、屏風を超へて之より走る。

第二節 資料の分析・考察

「平家」巻五咸陽宮における荆軻の叙述の典拠として『史記』・『燕丹子伝』それぞれをうけて生成・流传した説話とする説⁽¹⁾と『日本見在書目録』に「晋、処士斐啓撰」と記される『燕丹子伝』によるという説⁽²⁾がある。「平家」の研究には、延慶本・八坂本・源平盛衰記等の各テキストの比較が必要とされるようであるが、中国の典籍から見た「平家」という視点にたち、岩波古典文学大系による「平家」との比較を中心に考察をしてみることとする。

資料1に関して「平家」では、燕の太子丹の親孝行譚と烏白頭馬生角の奇瑞とが記述されている。後半の烏白頭馬生角の奇瑞に関しては詳細な研究書⁽³⁾もあり、論考はそれらの研究に委ねることとする。燕の太子丹が、帰国を望む理由として、親を恋い慕うという恩愛の情が日本系のものの中心に据えられている。『史記』刺客列伝の記述によれば、秦王政（始皇帝）は、趙の都邯鄲で、趙に人質として送られていた子楚（のちの莊襄王）の子どもとして生まれたとされる。しかしながら、『史記』呂不韋列伝を見れば、秦王政は呂不韋の子であると記述されている。詳述はさけるが、秦から捨子同然に趙に人質に出されていた子楚を大商人、呂不韋が「奇貨居くべし」と目をつけ、昭襄王の太子、安国君の養子とすることに成功する。ところが、調子にのった子楚は呂不韋の愛人を妻にしたいと強引に取っていつてしまう。その時、その女性には呂不韋の子をやどしていたとする司馬遷の記述には説得力があり、事実であったと考えられる。燕の太子丹は、趙に生まれた秦王政と趙で交友があり、秦王政が帰国して王となり、旧知の間柄で秦の国での人質生活を、期待していたが、期待はずれだと失望して「怨みて亡げ帰る」のである。幼くして王位についた秦王政には、呂不韋が宰相で、しかももとの愛人(秦王政の実母)とのスキャンダル等、秦国内で内憂外患にさらされるという時期でもあった。燕の太子丹は「情にもろい」側面をもっていて、刺客列伝には、情に流され、燕国全体を視野に入れた判断が下せず、荊軻の始皇帝暗殺失敗の要因は燕の太子丹にあると言っても過言ではない。中国系では燕の太子丹は決して善玉として扱われていないのである。

資料2は、『史記』正義注引「燕丹子伝」が中心となっている。ここでは徹底して始皇帝を悪玉として、燕の太子丹が始皇帝の奸計に陥入らず、困難な状況があると奇跡が起り、無事帰国することができたとする。これも親孝行譚の延長として「これも孝行のこころざしを冥顕あはれみ給ふに

よってなり。」とむすんでいるのである。『史記』の本文では、その内容はすべて削除されている。ところで、「史記正義注」の撰者、張守節については、新・旧の唐書に記載がなく、学問の系統等、詳しいことは明らかではない。「史記正義序」で見ると、三十余年の歳月をかけて「史記正義」三十巻を完成したという。ただ、「正義」の注文の中に、「張先生の旧本に『士』字有り、先生疑ふらくは是れ衍字ならんと、又敢て除かず」と張守節の師とされる人が同姓の張先生と呼ばれる人の名として記されている。張先生を誰と特定するかについては諸説もあり、特定することは困難であるが、張守節の学問の傾向の一端を伺うことができる。司馬遷が刺客列伝の末尾の論贊で、「太史公曰はく、世に言ふ、荆軻其の太子丹の命を称するや、天粟を雨ふらし、馬角を生ずと太だ過れり」と、あり得べからざることとして否定しているにもかかわらず、張守節は「烏頭白馬生角」の奇瑞掲げたのは、張守節の師の張先生の学説に従ったからである。張先生は信頼に足るとされるテキストに恐らく衍字・衍文であろうと思われるものがあっても後世に判断を委ねるという態度で掲載するほどであり、唐代にでまわったテキストには、燕の太子丹の「烏頭白馬生角」が、掲載されていたと思われる。唐代は伝奇小説の全盛期にもあたり、索隱注を撰した司馬貞も取りあげていることから考えても、唐代に特有な現象のように考えられる。資料3については、『史記』の叙述内容と「平家」の叙述内容が極めて共通している箇所である。ただ、「范於期」「樊於期」の表記が混在しているが、これは諸本の間の異同もあるようで問題として取りあげるほどではなからう。樊於期にかけられた懸賞金について、「史記」では「金千斤、邑万家」となっているのを「平家」では「金五百斤」としている。このことについて今成元昭氏は「書承過程での変化とは考えにくい。＜莫大な賞金＞という関節がはずれていなければ、その額の詳細などはどうでもよいのである。」と述べている。この資料3は「史記」をうけて生成・

流传した説話であると考えられる資料である。

資料4について「平家」では秦舞陽は、勇氣ある、そして心やさしい人物として描かれている。岩波大系本に引く田村麻呂記の「怒って眼を廻らせば猛獸忽ち斃れ、咲って眉を舒れば稚子早くも懐く」という、わが国の英雄、豪傑の理想像として人物造型がなされている。しかし、『史記』では、街中で喧嘩沙汰ばかり起す無頼漢として、秦舞陽は扱われている。燕の太子丹から秦舞陽との同行を勧められた荊軻は、別の人物を待ち決行すると言うほど秦舞陽に信頼を置いていなかった。太子は荊軻が決行をしぶつているのではと疑い、秦舞陽を先発として派遣すると言うと、荊軻は「往きて返らざる者は豎子なり」と太子丹を叱責しているのである。

資料5・6は資料3で同様に「史記」に基づき「平家」が生成されたと考えられる資料である。

資料7は「史記」正義注引く「燕丹子伝」であるが、「史記」本文の緊迫した荊軻と秦王政との息づまるような追跡劇とは異った、劇的な展開が「燕丹子伝」にはある。わが国の「平家」の諸本におけるこの場面の考察について詳細な研究書もあるので⁽⁴⁾、別の観点から考察してみる。それは、侍医夏無且が実際に、暗殺現場を目撃したという、『史記』の記述内容について触れてみる。刺客列伝の論贊に、「始め公孫季功・董生・夏無且と遊ぶ、具さに其の事を知る。余の為に之を道ふこと是の如し」とある。余については、司馬遷・司馬談のいずれかという議論のあるものの、王国維の『太史公行年考』・顧頡剛の「司馬談作史」により、司馬談であるとされる。公孫季功は伝未詳。董生は董仲舒だとする説が有力である。荊軻が秦王政を刺殺しようとしたのは前二二七年で、董仲舒の在世は前一七九～前九三。司馬談の在世は?～前一一〇。司馬遷の在世は前一四五～前八六。「史記」本文の記述内容から考えると夏無且→公孫季功・董生→司馬談とその歴史的現場の話が伝承されたと考えるのが妥当であろう。してみると、

秦の宮殿で荆軻が秦王政を追いまわしたというのは『史記』本文の叙述がその様子を正確に伝えていることが理解できるはずである。正義注引「燕丹子伝」は小説・ドラマとしての観点から見ると興味をそそられる場面である。吉川幸次郎氏は、中国文学と日本文学とのそれぞれの特質を中国文学は政治を、日本文学は愛をその根底におくと喝破されているが、「燕丹子伝」において、別れの場面において愛する花陽夫人に琴をひかせ、死出のはなむけとするテーマの設定はわが国の愛の文学につながるものであり、「平家」を生成した人々に強く印象づけられ、取りあげられたものと思われる。

最後に『史記』の記述と「平家」の内容の先後の順序が甚しく異っている箇所がある。これについては今成・山下両氏の克明な分析・考察のなされた論⁶⁾が展開されているので、それに委ねることとして、「平家」のその部分を資料として掲げおくとどめる。

1. 荆軻、「この事あなかしこ、人にひろふすな」といふ。先生申しけるは、「人にうたがはれぬるにすぎたる恥こそなけれ。此事もれぬる物ならば、われうたがはれなんず」とて、門前なる李の木にかしらをつきあて、うちくだいてぞ死にける。
2. 荆軻いかって、つるぎをなげかけたてまつる。おりふし御前に番の医師の候けるが、薬の袋を荆軻がつるぎになげあはせたり。つるぎ薬の袋をかけられながら、口六尺の銅の柱をなからまでこそきったりけれ。荆軻又剣ももたねばつづいてもなげず、王たちかへってわがつるぎをめしよせて、荆軻を八ざきにこそし給ひけれ。

以上の分析・考察の結果をまとめてみると、「燕丹子伝」が我が国に流布して、広く読まれたとする形跡は見あたらない。中国においても現

存する「燕丹子伝」は、清の紀昀が明の永楽大典から抄出したものを孫星衍が校定して、平津館叢書にはじめて収められたものだと言われている。⁶⁾ 我が国においても、中国においても「燕丹子伝」は広く読者層を持って、読まれた書ではないと考えられる。そのように考えると『史記』及び『史記』所載の正義注・索隠注に基づき、「平家」の咸陽宮は生成されたとするのが、妥当と思われる。

おわりに

『平家物語』における漢籍中に登場する人物については、わが国独得の人物に対する、思い入れや価値評価があり、中国の歴史事実や人物評価を度外視して、人物造型をする傾向がある。たとえば、中唐の文壇では、韓愈の古文復興運動が主流となり、白居易・元稹は民衆及び多くの支持があるものの、文壇の主流から阻害され、「元輕白俗」と蔑視されるような状況があるにもかかわらず、わが国においては「白氏長慶集」は、清少納言の自慢話の例をあげるまでもなく、文学として教養として平安貴族社会にあっては金科玉条の書として重宝がられていたのである。

更に中国の歴史書は、「述べて作らず」（『論語』述而篇）という「事実は正確に述べ、創作しない」という基本的な姿勢で貫かれている。ところが、それを我が国に移入する際、わが国固有な価値観で感情移入し、人物造型をする傾向がある。わが国固有な価値観とは、

- 一、判官びいき。戦い敗れたり、滅亡の憂き目にあった人物に対して、特別な同情をよせる。
- 二、現実を直視せず、情緒的な把握をする。政治状況の背景や熾烈な人間の確執を度外視して、愛のドラマ、人間の善的要素を過大視する。

『平家物語』の漢籍の受容について概観してみただけで、これだけの差異を見出すことができた。日中比較文学の研究熱が高まっている中で、

本質的な部分（人物評価・人物造型等）について、考究の時期にきているように思われる。今回の論考は「平家」に限定して事例を考察してみたもので、周辺文学については後日稿を改めて考察の機会をもらいたいと考えている。「平家」研究の専門家の御批評を受けながら、更に考察を深めていく所存である。

- (1) 今成元昭氏『平家物語流伝考』一九五頁
- (2) 青木正児氏『支那文学芸術考』四七頁
- (3) 今成元昭氏『平家物語流伝考』二〇〇頁～二〇四頁
- (4) 山下宏明氏『平家物語の生成』二八一頁～二八六頁
- (5) 今成・山下両氏の前掲書
- (6) 今成氏の前掲書